

先週、児童文学者の石浜みかる氏(1941-)が横浜本郷台教会の「平和聖日」礼拝で、「同調圧力に抗する信仰を」と題して、説教をされました。彼女の父上は神社参拝を拒否したため、治安維持法により投獄され、さらに、獄中で被爆されました。「非国民」の子と呼ばれ、弾圧を受けたご家族の歴史をお持ちです。ですから、幼い時から、鋭い意識、感性を持って歩まれた方だと知りました。戦前は一億玉砕、戦後は一億総懺悔、今はチェック機能を果たしていないマス・メディアに流され、社会の同調の中に埋没している日本人のメンタリティの愚かさ、危険性を指摘され、自分自身の信仰、信念を持って生きるよう勧められました。

石浜氏が何冊かの著書を持って来られましたので、その一冊『満州基督教開拓団と賀川豊彦』というブックレットを購入し、読みました。これは賀川豊彦記念 松沢資料館が2006年に企画した特別展の資料です。石浜氏が、ご自分と同様に「非国民」とされた、ホーリネスの牧師が満州基督教開拓団に加わったことを知り、聞き取り調査をされ、証言をまとめ、紹介しておられます。

さて、このブックレットには満州基督教開拓団について、戒能信生氏の解説、石浜みかる氏の調査書、開拓団員の証言、雨宮栄一氏の評論のほかに、写真、名簿などの資料もありました。この記録を読み、生々しい事態、事情を知り、驚き、悲しく、胸が張り裂けるような思いになりました。

日本政府は1931年の満州事変の5年後に国策として、「満州農業移民計画」を定め、27万人が農地を得ようと、開拓移民として満州に移住しました。僅か10年後に敗戦となり、彼らはすべてを捨てて帰国しましたが、この過程で8万人が命を失ったとされています。更に「残留」という名称をつけられていますが、推定7000人の子ども、女性たちが棄民とされました。



キリスト教界でも熱情の伝道者賀川豊彦が呼びかけ人となり、基督教開拓団を募り、1941年に73世帯205名の人々がハルビンの西南16キロの長嶺子に入植、1945年に11名の人々が未開の開拓地・太平鎮に入植しました。敗戦直前に壮年の男性は招集を受け、開拓地に残されたのは老人、女性、子どもとなりました。敗戦を迎え、彼らだけで引き上げざるを得ませんでした。結果、死者合計54名、不詳47名で、帰国を確認できた人は115名だけという悲劇になってしまいました。入植した方々が武装しておらず、現地の人に親切だったため、これでも、比較的被害が少なかったとのことでした。

日本軍の中国侵略には批判的であり、中国民衆への被害に心を痛めていた賀川が、満州への伝道旅行をするうちに政財界の上層部の満州開発のロマンに取り込まれていきました。そして「勇敢に参加せよ」と呼び掛け、開拓村を満州に作るという計画を実行させてしまったのです。土地収用の実態も、現地農民の意志を圧殺し、二束三文の価格で強行買収するものであったと証言が残されています。また、入植者は農業経験者が少なく、風土、農地の実態も知らず、侵略という意識は全く持ち得ず、「五族協和、王道楽土」という、夢見るようなスローガンを信じて、移民となったわけです。この開拓団を送り出した日本基督教聯盟は彼らのバックアップ、援助など一切しなかったと資料は告げています。キリスト教界からも棄民となった入植者たちでした。本当に申し訳なさで一杯です。これが私たちキリスト者の罪責の一つです。

戦時下には富国強兵の国策にあやかりと無批判に従い、戦後には無責任に自己保身に走り、今また、経済的利益を優先する社会の同調圧力に屈していいでしょうか。